

シーズン前に多彩な取り組み

てしかがえこまち推進協議会エコツアーリズム推進部会(池田篤英部会長)は、3月20、21日に「てしかが野外活動スキルアップ講習会」を、3月26日には「てしかが滞在型観光推進フォーラム」をそれぞれ川湯ふるさと館で開催しました。

「てしかが野外活動スキルアップ講習会」には、町内外からガイド事業者など約40人が参加しました。

講習会は、国内旅行で増加傾向にあるエコツアーに携わるガイド事業者や、さまざまな野外活動、環境教育にかかわる方を対象としたもので、環境教育プログラム(プロジェクトワイルド)やリスクマネジメントの講座を通して、安全な野外活動を目指したものです。

プロジェクトワイルドとは世界の多くの国で実行されている、子どもたちを指導する教育者向けに米国で開発された環境教育プログラム

「プロジェクトワイルド」は、増加傾向にある屈斜路湖での遊漁を生かした観光振興について考えようと、同部会の「屈斜路湖遊漁プロジェクト」村上幸喜委員長が主体となり開催したもので、町内外から約40人の聴講者が集まりました。



野外活動スキルアップ講座の様子

ラムです。リスクマネジメントも子ども、NPO法人ねおすの小林峻さんが講師を務めました。

講習会では、実際にフィールドへ出て受講者がガイド役とお客さま役に分かれてお互いを評価するなど、より実践的な講座も行われました。

受講者の1人は「ものごとを伝えるためのツールなど、分かつてはいてもあらためてとてためになった。クマ、ハチ、雷についても野外活動では大切な知識。みんなスキルアップできれば」と感想を述べていました。

またてしかが滞在型観光推進フォーラムは、増加傾向にある屈斜路湖での遊漁を生かした観光振興について考えようと、同部会の「屈斜路湖遊漁プロジェクト」村上幸喜委員長が主体となり開催したもので、町内外から約40人の聴講者が集まりました。

またてしかが滞在型観光推進フォーラムは、増加傾向にある屈斜路湖での遊漁を生かした観光振興について考えようと、同部会の「屈斜路湖遊漁プロジェクト」村上幸喜委員長が主体となり開催したもので、町内外から約40人の聴講者が集まりました。

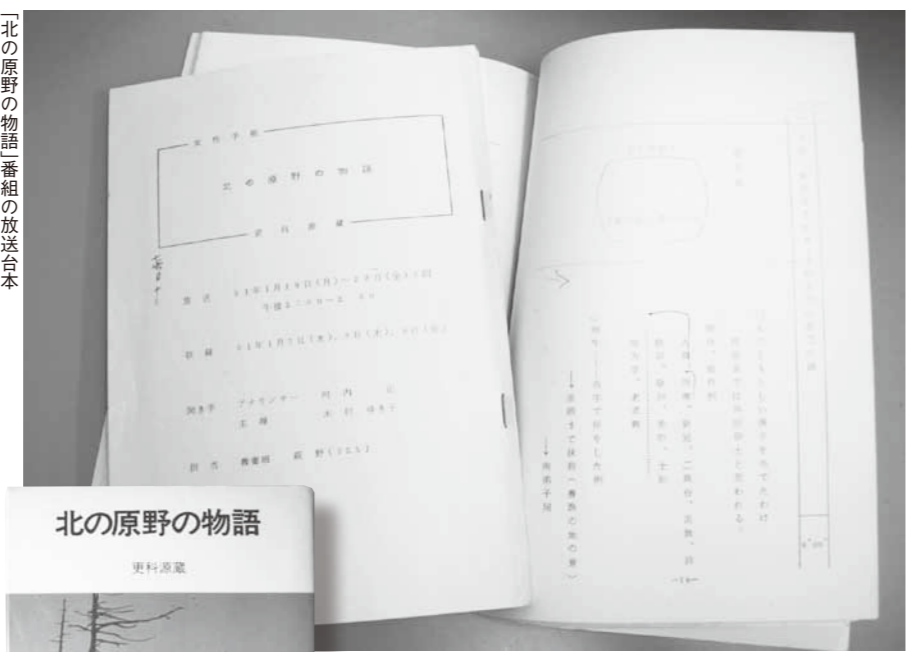
におけるスポーツフィッシングと観光振興の可能性を探る」をテーマに、フレイッシュUP SUGISAKA代表取締役の杉坂隆久さん、滝上町役場第三セクター管理室長の橋本収さん、朱鞠内湖淡水漁業協同組合組合長代理の中南裕行さんの3人を講師に迎え、講演会とパネルディスカッションを行いました。

講演で杉坂さんは「屈斜路湖は国内屈指の遊漁フィールドだが、資源管理をしなければやがて枯渇する」と警鐘を鳴らしました。

パネルディスカッションには、徳永町長や地元観光事業者もパネラーとして出席し、講師らと議論を交わしました。

徳永町長は今後の取り組みについて「屈斜路湖の今後の活用については大きな課題である。次期総合計画策定時に、町民を交えて検討を続けていきたい」と話しました。

徳永町長は今後の取り組みについて「屈斜路湖の今後の活用については大きな課題である。次期総合計画策定時に、町民を交えて検討を続けていきたい」と話しました。



北の原野の物語 更科源藏



1978(昭和53)年刊



更科が彫った「小熊(こぐま)」と「丸木舟を漕(こ)ぐ女」

『北の原野の物語』

この著書は1978(昭和53)年に上梓出版された自伝的回想録で、1976(昭和51)年にNHK札幌のテレビ番組「女性手帳」で「北の原野の物語」わが生い立ち記」と題して5回にわたって語ったものと、1965昭和40年に刊行された「熊牛原野」の一部を書き改めたものです。

更科が子どものころ、熊牛原野から弟子屈の街の学校へ通う夏、たて歩くのがやりきれなく、うつとらしいので、途中でげたを脱いで、はだしで歩くのです。「学校の近くになったところに、少しなま温かい水がわいて流れがあったので、足を洗う」とあります。これは、更科が編さんした『弟子屈町史』『弟子屈地名調』の「ユックトイーユック(鹿)トイ(土)公園のぬるい湯がわいているところ、昔シカがこの土を舐めに集まった」で、弟子屈小学校と役場庁舎の間にあった「弟子屈公園」のところで、大正時代の街の様子を描かれています。

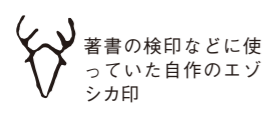
「やア、めんこい(かわいい)だけど先生これ、だめだわ、コタンでは昔から人形をつくってはいけななんだもの」。近く阿寒国立公園に指定されることが決まっていた屈

斜路湖(1934(昭和9)年に阿寒国立公園に指定)で、コタンの人たちが得意とする彫刻を訪れる人々に売って、少しでも生活の足しになればと、生活器具や風俗人形などをコタンの学校で自ら彫って教えるつもりでいました。コタンの学校を去る日、途中まで見送りに来てくれた子どもたちと一休みしたとき、更科が彫った子グマや丸木舟をこぐ女の人形を見せたのです。子どもたちからもアイヌ文化の奥深さを教えられ「何もしてやれなかつた。何もできなかった」と、自分の力のなさにガツクリと肩を落とします。

更科は、熊牛原野やコタンでの生活を「世の中から忘れられたような自然の奥地で生活したというところが、私の人生を豊かに育ててくれたように思います。いかにお互いのしく仲よく暮らすのにはどうしたらよいか、そんな平凡なことしか考えていませんでした。私はあまり人の喜ばない、ひどい荒れ地のはてで生まれ育ったことを、決して不幸だったなどということを、一度も思ったことがありませんでした」と回想しています。



更科源藏(さらしなげんぞう) ●1904(明治37)年、弟子屈町熊牛原野(南弟子屈)に生まれ、1985(昭和60)年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動を続けた。 ▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。



著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印

てしかがえこまち推進協議会会長(徳永町長)は3月23日、ホスピタリティ講座「まちぐるみでおもてなしセミナー」を川湯のホテルで開催しました。セミナーは、数ある観光地の中から弟子屈町を選んで訪れていただいた観光のお客さまに対して、来て良かった、そして、また弟子屈町に来てみたいという印象を持ってもらえるよう、町民一人が心を配り、温かくもてなす機運を高めることを目的に開催されたものです。この日は、町内各地域からホテルや旅館などの宿泊業はもとより、飲食業などの事業者ら約40人が受講しました。

女性限定 エレガンスセミナーに40人

ホスピタリティ講座「まちぐるみでおもてなしセミナー」

定「エレガンスセミナー」は、師尾さんが担当。普段は銀座会場などで講師を務めている師尾さんは、立ち姿やお辞儀、女性ならではの座り方などのボーリングについて、実技を交えながらきめ細かく解説し、日々の業務での徹底を促しました。

参加した女性は「こうしたセミナーは受けてみないと誰も教えてくれないことが多い。特にエレガンスセミナーは女性のたしなみとして継続して受講してみたい」と話し、講師の坂部さん、師尾さんは「受講者皆さんの熱意をものすごく感じた。日々の努力の積み重ねを継続してほしい」と受講者の意欲を褒めたたえていました。



エレガンスセミナーの講師、師尾さん

誰にでも優しい町づくりを

ユニバーサルデザイン講習会



熱心に語る平田さん

てしかがえこまち推進協議会UD部会(三木亨部会長)主催の「ユニバーサルデザイン講演会」が3月22日、川湯ふるさと館で開催されました。

講演会は、ユニバーサルデザインの考え方や、高齢者、体の不自由な方など、だれもが安心して観光を楽しむ環境づくりを考えようと開催されました。

講師は、全国各地の実践事例や導入方法に詳しい、みずほ総合研究所研究開発部主任研究員の平田賢典さん。約20人の受講者に対して、ますます進展する高齢社会の現状や、障害者の社会参加の増加などを紹介し、観光地としてユニバーサルデザインの地域づくりに取り組む意義を強調しました。

さらに平田さんは、弟子屈町が目指す観光地の在り方については、ユニバーサルデザインの推進と、豊かな森林資源や温泉などを活用した「森林セラピー」を組み合わせた観光地づくりではと提案するとともに「まずは町の不便さを見直すことから始めては」と実践を促しました。

参加者は、メモを取るなどして熱心に聞き入っていました。